



燕石襍志

易武

15  
1492  
2



門 495  
號 1492  
卷 2

夷石雜志卷之二

鎌倉軒

龜澤 實吉述



① 古歌の訛

新編陶集といふもの小倉の成張範盜賊のちよ高野山に登りて

の外に葉投を抄りていふものあり覺えられ後世のちよ

うらや骨堂へ投入せし一首抄むとらん

高野山麓の骨堂の遺蹟を記すに云く此の骨堂は後醍醐天皇の御

とりのついでに成りしに云く骨堂の遺蹟を記すに云く此の骨堂は

普賢院殿高野山にありしに云く骨堂へ予も存命のちよ

むこのいふものありしに云く骨堂の遺蹟を記すに云く此の骨堂は

高野山麓の骨堂の遺蹟を記すに云く此の骨堂は

高野山麓の骨堂の遺蹟を記すに云く此の骨堂は

早稲田大学図書館  
35.2.1  
蔵書









昔もつた袖らとあられ世の中も寒ら民の冬の中も

十訓抄云、仁徳天皇の三年の初みくた物をとめり民の烟の暖る

を暖と申し、一徳院の冬之夜御衣を脱ぎ四海の民を暖むるは

とりのつらさるるを御られぬ是又賢王聖主の善は御恵を

黎之黔首と云ふは、今も不易故あり君の民をさす御と

とりのつらさるるを御られぬ是又賢王聖主の善は御恵を

極撰改りくともを御られぬ是又賢王聖主の善は御恵を

と民をめぐりてさへ入るるありければ、一徳院の極寒の夜に御衣を

母のけさるるを御られぬ是又賢王聖主の善は御恵を

は且日本國の人民をさす御られぬ是又賢王聖主の善は御恵を

ありとを御られぬ是又賢王聖主の善は御恵を

御殿よりあけりてのひらりとさす御られぬ是又賢王聖主の善は御恵を

と民の寛を脱ぎ御衣を脱ぎ民の寒れを暖むるは

を深くゆれを脱ぎとやまらざるもいと世俗の只

を暖めりてをさす御られぬ是又賢王聖主の善は御恵を

と今愚按ざるは是彼久しく侍わたりたる故古事記云

院、御宇、源國盛、任越前守、其時藤原為時、附於女房

獻書其状云、若學寒夜紅淚霑袖、除月春朝、蒼天

眼云云、天皇覽之、敢不差御膳、入夜御帳、湯位而

給、尤相府参入、知其如此、忽召國盛、令進辭書

為一時、令任越前守、國盛家中上下、涕泣、國盛自受病

及秋、雖任播磨守、猶依此病、遂逝去云云、

侍わたりて、一徳帝の寒夜に御衣を脱めりて

傳揚せり、醍醐院の母んふまらるるや大境是之八

延喜の帝の

延喜の帝の

延喜の帝の

延喜の帝の



あつたてど人よままとまよりりたれりなりうへむごの今めをを  
せくまごりとのとらんをみまごりりる曲草子云婦の嫉妬をたる百  
拙を掩ふとりの二歌をもめり情ふじ或の夜あまごとの男のあ  
らちをばうしちまご意まらんめをさひ或の髪を闢く後妻とまじ  
をも嫉中ん僅よごひごりごつらねごをこごまごつらごのらや  
ちつをあらうしちらいつく育ごごるべし世俗只伊勢物語のまをそと  
大和物語も又ゆる貞女の歌よみまごりあるをあらふりて今一番の  
都合しごりりの大和物語女部花物語ホよりの二歌をあらふらあせり  
のあらうしちまご意まらんめをさひ或の髪を闢く後妻とまじ  
**四** 水 **水**  
夫本集第九六雜部八俊頼朝臣のうら  
俊頼朝臣のうら

の遊あとりりの實の水よあを春の曠野よとらぐりのををく靴  
をうれい水の流る如くよあをををうらうらあをのうら野馬陽を  
ををうらうらあをのうら根く所あらうなよ紗を  
性一靈一集蘇陽歌喻 見二卷十  
運々春日風光動陽歌紛々曠野飛舉體空々無  
所有狂兒迷渴遂忘歸遠而似水近無物走馬流  
川竹處依運版註智論曰飢渴心極見熱氣  
野馬謂之為水疾走趣之轉近轉滅走馬流川  
謂陽空狀貌也  
遊水のうらうらあをのうら俊頼朝臣のうら  
**五** 一の橋  
其角が五え集之解くは斐向きうらうらく俳諧者流を往く

さるも亦勘りしん

ほととぎす一の橋の夜中けりねとりの菰白の鮮かたもわ  
らぬよりの二の橋を江戸本所なる一月二日月の橋なりと云の入り  
あると云の一向けえと其南の菰白の格をいふれは新声と  
之とも比名を私にけりぬと云の入りは本所の昔より一月二日月と唱  
く一の橋二の橋と呼ぶなり按じると二の橋は山味河深草有  
雅列府志第九卷在跡門下云月見岡在伏見源平  
盛衰記云源軍或自伏見赴尾山月見岡到法性寺  
一ニ橋云山別名跡志卷十二云一橋在東福寺北  
門北一町餘伏見街道中央從此南方東福寺境内  
凡八町内有二橋是其一也云云曲亭子云法性寺東福  
寺北門の南西向あり盛衰記は法性寺の一の橋と云る

さるも法性寺の境内に属するべしと其南の菰白の在致と  
あり拾遺集に壬生忠見が

つらと帝さくせくらんはとさひ淀のさるの夜あるよ

と橋をいふをいふと大坂より萩松より京のぼりさる人淀の  
そとに夜ゆりたふりたるも深草や東福寺のほととぎすの二の橋を  
渡るといふがさるべしとさひ淀のさるの夜あるよと  
ハ横雲のひかき一と二声とせられさるるよと亦めがらさるるよと夏の  
夜のほととぎすの餘情と云はれと云はれと亦昔よが

つらとふも淀橋ありとほととぎすのほととぎすのほととぎすのほととぎす  
淀橋を渡のほととぎすのほととぎすのほととぎすのほととぎすのほととぎす  
中よりさるよと水も浅らるよと

六 房 錢

亦珍るト集也

窓銭のうた世をさるる人雪見り也

其意

或説より其の時ありやん窓一は身月二百支の裸役をあり  
 是くさありされを窓銭といふ其角がうた世をさるる人雪見り也  
 といれどいふらの窓銭のさるる人雪見り也  
 所見りしやそのありとも雪見り月えとも窓一は窓閉るといふ  
 十月の刻て冬の窓を閉る隙りの風を感ふる人雪見り也  
 小抄按どる窓銭の房銭を揚り致其角が録草より假字よてヤド  
 銭と書するやをマ小帳に真名よ窓と書し印行しりる人雪見り也  
 此後人強さるるを註せんといふ物首の鏡をさるる人雪見り也  
 紀一頁曰放房銭宋朝會要曰大中祥符五年正月以  
 雪寒應店宅務賃屋者免儗錢三日此雨雪免房錢

之始也七年二月詔貧民住官舍者遇冬至寒食

儗直三日此節日放免之始也其角のこの故事をさるる人

雪をさるる人雪見り也  
 小賃銭のさるる人雪見り也  
 務賃屋のさるる人雪見り也

りとい降る雪をさるる人雪見り也  
 七夕也

七夕也

之縁六年六月廿八日其角が二團の神社祈雨の獲り世奉り人のさる  
 ところ其角が自筆の短冊  
 名を書しりる人雪見り也  
 大さや回をみかぐりの神さるる人雪見り也  
 難いこと多き一旬の題をさるる人雪見り也









大人の稱呼先生は優ると遠く亦接するは皇胤紹運録に武内宿禰の孫平輝真鳥の子の紀大人と云ふ人見えたり亦平治物語源平兼光記亦帯刀先生義賢あり併らるる名と職と喩るのそらより大人之生と同く大人を云ふと統と云ふ日本紀より見えたり

○按神記云舊歳太右之時有大一人遠征家無餘一人唯有女牡馬一匹女親娘之亦是大人謂有威權者也見于卷十四

十 降教吉凶 五報 夢寐

賢者之言曰禍福將至善必先知之不善必先知之故至誠如神信哉此言也氣之動物物之感人搖傷性情形諸舞踊照燭三才輝麗萬有靈祇待之以致警幽禍福不招而求謂之天吉凶不求而得謂之命

或謂吉凶前定或謂禍福無門夫命運非人所能也而人能致之致之味悟身枯人始悟不亦遲乎

○本一事詩曰劉希夷嘗為詩曰今年花落顏色改明年花開復誰在忽然悟曰其不祥歟復遺思逾時又曰

身一年歲歲花相似似歲歲年年人不同又惡之或解之曰

○空進士作明堂火珠詩贖帳曰夜來雙月滿曙後

一星孤時以為警告及末年曙卒一女名星星人始悟其自識 共載于廣百川 傳子後

○教をいひとてあはせたるものありけれあるやうなればせういふもの

さうなるをいふるをいふるも速懷おこしくいへりくぬきいふるを

よふよふの芝蓮のいさゝかめぬれけり雨の中吟とてよふよふぬきいふる

ひふ定方チイノキヤクとていぬ母の事もなまじりくうれいしむるがごとくの中チカキに  
宗尊と申すのりし後醍醐院のみとていぬ母の御軍の御母りなるか  
うしのみ母の事とて後よ為花御の御母りなるか  
後方のうしよ母の事とて世のうれいしむるがごとくの中チカキに  
あつたはるる事なり

らうとの事なりうれいしむるがごとくの中チカキに  
らうの東方朔がごとくをい用之則為虎不用則為鼠と申すなり  
さるべしやとていぬ母の事とていぬ母の御軍の御母りなるか  
もつたはるる事なり  
物籍 異本女申志 亦一鏡は宗尊の親王百首の御歌をいぬ母りなるか  
海軍の御母りなるか  
果しとていぬ母の事とていぬ母の御軍の御母りなるか  
果しとていぬ母の事とていぬ母の御軍の御母りなるか

○光厳院の正慶二年春二月のころ東軍子嗣破の御をぬりぬるは  
然よしとていぬ母の御軍の御母りなるか  
九條左衛門尉師宗 果しとていぬ母の御軍の御母りなるか  
たつたはるる事なり  
果しとていぬ母の御軍の御母りなるか  
不吉なりとていぬ母の御軍の御母りなるか  
らん是年五月廿二日に至りて高時入道鎌倉へ滅亡せり  
○近世松崎蘭也といふ人の大腹といふ題の腹と服と通じりて世の  
腹といふ事なりとていぬ母の御軍の御母りなるか  
大あくやとていぬ母の御軍の御母りなるか  
腹をうらむとていぬ母の御軍の御母りなるか  
○予が物のらる母の事とていぬ母の御軍の御母りなるか





高竹石竹文と書この高の高竹の義よりありと孟子の五穀多寡同  
則賈相若とらんんんり高の訓と寡の音と近れをりて字を  
備りて高と書然孟子の寡寡よぬべし

五 鬼神論

鬼の大陽の精也故よこれをるるのりるるもその色赤とらあり  
りの鬼神の陰陽の義ありと王元論衡よりり亦史記黃帝の本記  
注よ死而不亡謂之神死而不祀謂之鬼とらんんん思按  
ある神のなるり鬼の氣なり人の心氣の秋なり鬼神亦秋なり人の心  
氣のよく眼目の視るるなりと鬼神のえがたれをりてるべし  
王元ハ人死して鬼とらんんん右未今往死するもの義億万人世間鬼を  
居よ意あるらんんんん論のりて盡ざる秋人死してその鬼魂  
さうい教ざる向の寛鬼とらんんん人の眼よらんんんん我俗これを

雲霧の妙と雲と霧と天地の氣と天地乃  
故に秋なりその秋なりとらんんんん聚るるらんんんん  
之れも秋なるらんんん絶るる跡なり氣息ハ人倫鳥獸の呼吸なり出づるの  
呼吸するらんんん秋なりとらんんん天寒なり朝ハ人これをらんんんん  
らんんん随て減と寛鬼の人よらんんんんその魂魄のりて教ざるあり  
らんんん其ハ死して數の年を待らんんんん魂魄既ハ散滅と鬼魂散滅とらんんんん寛鬼  
らんんんらんんん欲するらんんんらんんんや皆是れ狐狸の妖怪のらんんんん  
らんんんの狐狸のらんんんらんんんらんんんらんんんを寛鬼とらんんんんらんんんらんんん  
透ハ亡と塩尻云玉笑零音云人の之初生以て七月為臘人  
之初死以て七月為忌一臘而一魄成故七七四十九  
日而七七魄具矣一忌而一魄散故七七四十九日而  
七魄散矣故知鬼神之情狀とらんんんんんんん亡者の追薦也十

九月十三日止之日七魄散ぶるが故なり散トく後亦聚るとす一燈言の春の  
氷の解るがごとくその解んとするに氷は砕け氷は氷上は浮ゆがりの人死  
まるといふもその魂魄の散るが如く氷解く氷は帰る魄散と  
氷は帰る魄散と氷は砕ける氷の氷上は浮の類とあれば鬼神の威とされ  
あり竟鬼の魂廻るがごとく人をむめし何れの院の僧一僧極店より  
ありたる易経を購ひしときよゆりし披閱するに未をりしことを  
徒らうとの説くもとるべしなり僧堂を指す大よあざと笑ふ後よその  
夜徹頭よ發熱既痛し病と五六日ほど死んと人又某の坊に儒者  
あり一夕その門人某生忽然と死すもれに儒生これをもんすゆめ  
怪むるのりぬる月黄泉の客とありたるよありぬ本と問は門人の  
まるといふもとるべし今何の故ありてありの語をせらんと訝は門人  
らら微笑しそが易経注せんらるる妻年若むらるるゆめをいふ

このいふと世とぶたあつるよ死後りて日もあるが妻のりたるよんまの  
野老の書籍を賣つた易の坊の年某のれもりのあればいそぎ  
このいふはよ某の院の僧極店より彼易経を購ひしそが鏡一也  
とあるなりこのいふと笑ふが懼りしとバ失庭よ渠が政を打く懲らるとる  
五六日よ死ぶるといふは彼僧今之百なりありしとあるとていふ先生  
はよ托しつ責傷が病牀を病ひあへ面ありりりか打懲らんとていふま  
おとんとといふ儒生中といふ呆れ且しといふらくる子つ憤りの理されど彼  
僧の子と原未知なり只その言のを授るるを授くこれを殺さるに  
うや身を殺しつ仁をさるとも子に死にありありのいふとていふ  
まるといふ論は人まらし沈吟して先生の言固よいふとていふ今  
この處を失はるといふをいふ教くといふ儒生又いふらくるが彼まよ  
噴墓を建てるがいふとていふ其如く處るといふらくるがいふら

ほろり泣き流し女はさういふほど泣くはぬめりし儒生の次の日彼まゝに坐すは絆の  
魂を告げしはれが備はるゝ發死怖をさかすその人の墓陣を造立しつと  
町噂は競経すことなる程は病女、母とてりし後遂は福なりと云ひつゝの  
怪談よとていふも更は例の怪を物りしつゝのあはれいふもいふの  
さういふりしほどぬめりありありの異妻は相馴れしつゝのいふ  
ふしが嫡妻これをとれしと云ひ程はむき入乳をこらん夫の生くる隙あふ  
さつるるを刺らるゝにツるるを刺んとすると夫の母外面よりゆりま  
るこの異妻迹をえり大に怒りて夫は小児をうけ抱死す又外面よりま  
よらんがわらわら婦の心は自殺しつゝ夫のつたわらわら夫の母の  
悔し妻の枉死を哀し後のゆきどぬとるほどは釋恨を難かよとて  
さういふ言ひの親族のうへ遣しつゝ絆の母らあはれとてぬめりし  
難言とぬめりと頼み聞ゆるは推辭しつゝあはれとてぬめりし

孫とのりのりさういふ近隣は小児ありの乳汁をとつ西三日は人殺  
は彼親族の女々られは浴室よりゆりし途は彼釋見の母はあはれ怪しと  
母のいふもぬめりしを足さすよきとてつとぬびとぬめりし養  
育儀のさういふとていふはえとていふん牙が體を貸さぬめりし  
ゆり怪し死を限るさういふとていふもぬめりしとていふとていふ  
ゆりしがその夜俄頃よりさういふとていふの目も起し殊に怪しは彼釋  
見が啼泣し病入られを抱えあげて乳を食せるとは遠くはれと乳汁  
やゆらんさういふは吸て飽とあるが如くゆりし乳を賺しつゝとていふ  
は声音も面敷もその母は似たり亦釋見のうへ眠るなる時うとていふ  
はるが如くて物のいひさめも舊の如く怪しはぬめりしとていふ  
の父もも絆の慈を告ちし追薦の仏道を町噂より行ひ乳母と  
て彼乳を親育せりし女の病ひも遂は母とていふ後とていふ怪しとていふ





か討られしとつり是れその鬼とゆふ所の狐狸妖術の燃と力を鬼火と  
いひ狐狸の假鬼あり亦鬼火の気火よりつれが自心の夜にありの  
るればさうみ火を鬼火とのみ致式の坂上田村磨勅を奉り鈴鹿  
山に鬼を討とりつりあつて毒あり劍の巻も亦云美田源次綱頼光家  
宝の美劍を帶り夜一線大宮へ使へ反橋より鬼の身を切らる  
より頼光その劍を鬼切と名づくといふ或は反橋を羅摩門と  
いふも世より所部晴明識神を使役し後その鬼を一線反橋の  
上討り源頼光朝臣勅を奉り大江山に悪鬼を討本の説あり夫  
鬼神の形あり形ありれば竹を討竹を斬竹を根せん鬼と入て  
同いやく縦透歌を詠りつれは贈りとも解とべれ今の俗人より詩  
歌をさくといふ鬼も亦決りて詩歌を感ぜるとおぼへしこれを感ず  
る所の悪鬼よりいふ悪鬼よりいふ人民を残害んをさくといふ詩品

云。微藉之以昭告動天地感鬼神莫近於詩貫之が在  
今序も亦云らるるまもいふとてあめつらさをうごけりゆみえぬがよ  
神をいふそれと母のいせをとと女のうろをさかへてつれりゆのゆのむ  
をさるるぐさむのみの歌あり云云これ詩歌の徳を美さるるその實は  
過より天に左旋し月日に右旋しといふ所の狐狸のさその動くマ動ぶ  
るや人のそれとてあるあつて人の地上より立つたゆりその地震  
をさるるれども人よりこれを動せよあつて天地の固も動せなるらといひ  
るり鬼神を感ぜめんり詩歌をりて天地を動り鬼神を感ぜり  
ゆるりあつて葉が真龍を憎むる等しく世人あつて佳句秀歌を  
憎まん曩もある人ありいふあり 歌よみはやとらわれ天地のう  
らたつてくたつるのの千右の人りせよあつてあつてか真龍のくらのら  
絶倒とべり亦彼頼光朝臣綱は命とて羅城門に建る所の榜示今

勅諭

羅道司處

港運治務

卷之六

元年

六月三日

按律海關

る不京師ある其の家系と云ふ予近々その徴を摸したる墨本一  
幅を以てしつゝこれを見れば疑ひなきやうにわあどその徴半折  
るその文全くうざれども変化退治の告文といふと不審古き暮録也  
と往昔の妖賊を鬼とて変化とありあつるべし世俗らむを百鬼の鬼  
を以てしつゝ物物の醜惡強大なるものをとて鬼とありし  
本邦の古實秋草花と鬼百合鬼薊あり酒煙草蕃椒と鬼とありし  
名あり馬と鬼鹿をあり剣と鬼切鬼丸あり軍書と鬼神と呼ばるる某生  
を討つる如と軍陣又角鬚とある処あると云ふも朝雄頼光の退治ありし  
其の鬼とありしを知らん鬼切鬼丸の剣も亦あると鬼を切つて名  
はつたるありしと鬼百合鬼薊より鬼の如く後人附會の説をき  
て羅生門へ拾枚抄又羅生門の傳  
り今人の羅生門と書しこれらと云ふと替りしと云ふの如し

無三傳

唱ふべしや小世怪物語宇治拾遺物語ホム 柏原の御時らひし  
高元をこしらへらるるとありしと云ふ人の僻説あるべしされば昔好か徒説  
草に載たりし伊勢國の鬼の當時の人らにをりしものを眼病と云ふも  
のありと云ふと鬼とありしと云ふ亦按ずるも神代紀に大神軒遇突智  
の生るゝ至るゝ其母伊勢册尊息と云ふ化去ありし伊勢册尊の  
黄泉入りと云ふ其母結ありし膿涕虫流るるをりしと云ふ急ぎ走り廻り  
あつた伊勢册尊恨るゝ泉津醜女八人を遣はし追出んと云ふあつた  
ありし陰陽相列るゝの及秋醜女の鬼女なり今世は大神の脚小鬼  
面あるものをあつた大神と云ふあつた醜女と云ふと通じ日本神代  
説伊勢册尊を陰と云ふ伊勢册尊を陽と云ふ又伊勢册尊を鬼と云ふ伊  
勢册尊を神と云ふと云ふ伊勢の事と云ふ信鬼神の陰陽死生の事と  
○頼光の四天王ホムる今著聞集今昔物語ホムるんえんたれと云

スエタケ キントキ 季武平公時平貞道又材岡五郎平貞通 亦今昔物語より材岡五郎

ウニバハス井サカタ トナラ のりてト部白井酒田と稱するものいさらし綱 ツナ かつらもつんえと前太平

記とのありのうけられぬ鏡のまゆほりまらるる近曾文人里王客 チカコロゴジレボクカク

動されば彼書を引用し故事を説きわりのありらるる マエ

○鬼との字の人の名とどくもあらず モロコシ 唐山戦國の時鬼谷子

あり亦義経記と鬼一法眼ありられも紀一 キイチ べいと祖徳孫のり元禄

のころ伊丹の俳諧師と鬼貫とのありのあり イタニ 品是のころの オニツラ 多を志す

○今東北の隅を鬼門との風俗通と東海度朔山と有大桃樹其地

有鬼門神荼鬱壘二神守之 セント 主領萬鬼とのいひ ウツリツク 桃符桃

板も唐山の俗児とらん モロコシ 狄鬼門の カクジュ 黄帝宅 クラウテイタクキマウ 経 セツ たり其説

陽宅陰宅無魂五虚四實ホの月あり高廉の相宅要説 ヨウタクインタクムコングキヨシジツトウモクコウレンサウタクヨウヒツ のころ

葛藤の上葛藤を添ふ カウツウツクカウツウ 背人 セキジン 既宅相を信 タクサウシレ ちと東家の西 トウカニシ 西家 サイカ

の東 トカ との ノツク 二句 マト とも サ の タ 意 タ の タ を タ 論 タ する タ 是 タ らん

○昔 ムカシ の ヒナチヨ 美女 オニ を シウイニユウ さらし カネモト 鬼 カネモト と カネモト して カネモト 送り カネモト 拾 カネモト 送 カネモト 集 カネモト する カネモト 并 カネモト 盛 カネモト へ カネモト みる カネモト の カネモト の カネモト の カネモト あり

糸 イト の クロツク 黒 クロツク 塚 クノツク と クノツク 鬼 クノツク と クノツク あり クノツク ら クノツク れ クノツク る クノツク と クノツク の クノツク あり クノツク と クノツク する クノツク と クノツク 辨 クノツク する クノツク の クノツク も クノツク 外 クノツク 向 クノツク 如 クノツク 昔 クノツク 薩 クノツク 内 クノツク

心 ココロ 如 クノツク 夜 クノツク 又 クノツク の クノツク あり クノツク べ クノツク ー クノツク あり クノツク ば クノツク 兎 クノツク 戒 クノツク を クノツク 鬼 クノツク と クノツク して クノツク 人 クノツク も クノツク 準 クノツク する クノツク べ クノツク ー

詩歌吉凶追考

壬生忠岑 ミブノタツミネセンジ 宣 ミブノタツミネセンジ 吉 ミブノタツミネセンジ 青 ミブノタツミネセンジ みの ミブノタツミネセンジ 春 ミブノタツミネセンジ の ミブノタツミネセンジ 歌 ミブノタツミネセンジ あり ミブノタツミネセンジ け ミブノタツミネセンジ る ミブノタツミネセンジ 雲 ミブノタツミネセンジ の ミブノタツミネセンジ あり ミブノタツミネセンジ る ミブノタツミネセンジ こと ミブノタツミネセンジ

び ヒ る ヒ を ヒ 弱 ヒ 慎 ヒ と ヒ 難 ヒ ば ヒ や ヒ り ヒ と ヒ の ヒ ち ヒ 世 ヒ の ヒ 中 ヒ あり ヒ たり ヒ

名 ナ 歌 カ あり カ 顔 カ る カ は カ あり カ べ カ ー カ あり カ ば カ あり カ 追 カ 考 カ する カ こと カ あり カ べ カ ー

